

本山彦一と『歴代帝陵巡拝図』について

徳田 誠志

宮内庁書陵部陵墓調査官

はじめに

本山彦一が皇室への尊崇の念が厚かったことは様々なところでも指摘されており、この思いこそが彼の思想的な根幹であり、行動の規範になっていたことは間違いない。小稿では大正6年の元旦に、本山が知人や友人に配付した『歴代帝陵巡拝図』をとりあげて、この地図を発行した意図や、この時期の皇陵巡拝の実態を考えていくこととしたい。さらには皇陵巡拝の変遷をたどりながら、国民における陵墓への関心の変化を読み取っていくこととする。このことは、今後の陵墓のあり方を考えていく上でも重要な視点と考える。

それでは今から100年ほど前のわが国において、本山彦一が取り組んだ「皇陵巡拝」という活動と、その意図を見ていくこととしよう。

1. 『歴代帝陵巡拝図』刊行前史

本章では、『歴代帝陵巡拝図』が刊行される以前の状況を整理する。取り上げる事項は、2点である。その1つは、陵墓治定の歴史であり、2点目として明治時代における皇陵巡拝の状況である。

－1 陵墓治定の歴史

歴代天皇陵及びその他皇族墓は古代の律令制度下において祭祀実施規定が定められており、当時の記録によっても実際に祭祀が実施されていたことが窺える。しかしながら中世にあっては律令制度の形骸化、政治体制の変化、葬送思想の変化など様々な要因によって祭祀は途絶え、そのため陵墓の所伝が失われることとなった。

この状況は長く続いたものの江戸時代に入り治世が安定すると、陵墓の荒廃についても関心が及び、17世紀後半から18世紀前半の元禄・享保期において陵墓の探索が進められ、陵墓、特に歴代天皇陵の治定がなされた。その方法は京都所司代を通じて各地の奉行・領主から天皇陵の有無、口碑や伝承の報告を求め、現地踏査をおこなった上で各陵墓を決定していくものである。この時期に治定され、その場所が今日まで治定換えがなされていない歴代陵としては、34陵を数えることができる。この江戸幕府の探索と治定により各陵墓に柵がめぐらされ、みだりに立入ることを禁じる措置が図られる。しかしながら、一般人が各陵墓を参拝することはなかった。

その後、国学者の蒲生君平(明和5(1768)年～文化10(1813)年)のように、尊皇思想に基づき歴代天皇陵の荒廃を嘆き自ら近畿一帯で实地踏査を行い、享和元(1801)年には『山陵志』を刊行する人物が登場する。この『山陵志』は近畿一帯の全92陵を考証した書物であり、後の山陵家に大きな影響を与えた。しかしながら蒲生の踏査はあくまでも陵墓の探索が目的であって、後の皇陵巡拝とは異なるものと考えたい。

幕末になると文久2(1862)年に山陵奉行が初めて設置され、宇都宮藩家老戸田忠至(ただゆ

き)が任命される。そして、いわゆる「文久の治定と修陵」が実施された。この際の治定にあたっては陵墓への研究が深められてきたことを反映し、国学者の谷森善臣(文化14(1817)年~明治44(1911)年)らが加わって、『古事記』『日本書紀』『延喜式』等の文献史料に基づく検討がなされた。その結果、新たに55陵(今日の治定場所と移動していない歴代陵)を治定した。すなわち元禄・享保の治定と併せて、89の歴代陵が治定されたことになる。この文久期の陵墓探索においては、新たに治定した陵を含め、周濠の整備、鳥居・灯籠を配置した拝所の設置など、今日の景観につながる整備工事が実施される。この「拝所」の設置は、皇陵巡拝を考える上で重要であって、「陵をその場で参拝する」場所が整えられることとなる。

この時の動向としてもう一つ重要なことは、「陵は穢れた場所ではない」という考え方を、国家として決定したことである。それは慶應4(1868)年閏4月7日に制度事務局において「山陵御穢の事」が審議され、その結果、先の治定においても活躍した谷森らによって、陵墓は穢れた場所ではなくむしろ聖なる場であるという価値付けがなされていく。この動きは神仏分離思想とも相まって、仏教思想における死を穢れとする考え方からの大きな転換といえる。

このように幕末から明治初年にかけて、各陵において参拝する場所とその思想的背景が整えられることになる。しかしながら、一般大衆がすぐさま陵墓の参拝に駆けつけたとは考えられない。そもそも江戸時代の歴代陵は、京都東山山麓にある泉涌寺に営まれており一般人が参拝することはなく、この時代に天皇陵への関心は低かったものと思われる。そして江戸時代以前の歴代陵についても同様であったと考えられ、各地に営まれた陵墓を参拝するという行動は認められない。これは古代高塚式、すなわち古墳のような陵墓でも同様と考えられ、「ミササギ」という認識はあったにせよ、その場所は農業用水として濠水を利用する場であり、あるいは薪の採取場所として、時には花見の場所のような入会地であって、参拝の対象ではなかった。

このように一般大衆にとって陵墓はまだまだ縁遠いものであったが、歴代天皇陵の治定は明治新政府になっても引き続き進められる。幕末の元治元(1864)年に朝廷に再興された諸陵寮は、明治に入って神祇官・神祇省・教部省・内務省と所管が転々として、明治11(1878)年に宮内省に移管され御陵墓掛となり、同19年、諸陵寮に改められ今日の書陵部陵墓課につながっている。

そして明治22年2月11日に明治憲法が公布され、条約改正の議が起こるに際し、伊藤博文が次のように発言し、廟議がこれを可としている。

「万世一系の皇統を奉戴する帝国にして、歴代山陵の所在の未だ明かならざるものあるが如きは、外交上信を列国に失ふの甚だしきものなれば、速やかに之れを検覈(けんかく)し、以て国体の精華を中外に発揚せざるべからず」(『明治天皇紀』明治22年6月3日)

この結果、歴代陵のうち未治定であった14陵が治定され、それ以前の明治期に決定していた陵を含め、すべての治定作業を終えることとなった(大正15年に皇統加列された長慶天皇を除く)。このように歴代陵がすべて決定されたことは、「万世一系」を目に見える形で示すこととなり、すなわち、陵の存在は「見える皇統」という性格付けが、明治国家によってなされたと言えられる。

以上のとおり、陵墓、特に歴代天皇陵の治定についてみてきたが、この治定は明治22年の大日本帝国憲法の公布と軌を一にしており、明治政府によって政治的な背景をもとに進められてきたこ

とがわかる。しかしまだこの時点において、一般国民にとって陵墓は身近な存在とは言いがたく、参拝するという行動も一般的ではないと考えられる。

－2 明治時代の皇陵巡拝

続いて、明治時代の皇陵巡拝の状況を見ていきたい。この点については船越幹央の先行研究に導かれながら記述を進めていく(船越 2001)。

明治期の皇陵巡拝においてまず紹介する人物としては、奥野陣七があげられる。奥野については、外池昇の研究成果も併せて記述していく(外池 2016)。奥野は天保 13(1841)年に、大和国北葛城郡檜原村(現奈良県御所市)にて出生したという。幕末の動乱期には、勤王方として活躍したことを本人が伝えている。その後、明治 14(1881)年から宮内卿の認可を得て皇陵の巡拝を開始したとされ、皇陵への関心を深めていく。さらには神武天皇陵の近くに居住し、「報国社」という結社を営む。この結社の主な活動は、神武天皇陵への参拝者を募ることであり、文久の修陵以来整備されてきた神武天皇陵を広く民衆に伝えていくという啓蒙活動が中心となっている。このような活動とともに、明治 14 年以來続けてきた皇陵巡拝の成果を、『皇朝歴代史』という書物にまとめて刊行する(奥野 1887)。初版が刊行された年月日は、現在国会図書館が所蔵する図書の奥付では明治 20 年 12 月とあり、同 25 年に訂正版が出版されている。25 年刊行の奥付では編輯兼出版者が「奥野陣七」であり、発行所が「畝傍檜原教会本院」とある。このことから、明治 23 年に檜原神宮が創建されたことを契機に、「報国社」を「畝傍檜原教会本院」と改名したことが窺える。

この『皇朝歴代史』は歴代天皇名・陵名を冒頭に記し、各天皇の簡単な御事蹟をまとめたうえで、その天皇陵の所在地を記す。本書は、単に陵名とその住所を記すにとどまらず周囲の延長や方向を記すなど、自らの踏査結果を踏まえた記述がなされているといえる。この図書を手に参拝者が現われたか否かは不明であるが、本書は歴代陵の所在地を示した出版物として、陵の治定完了前後からそれほど時間をおかずに刊行された図書といえよう。

その後奥野は、明治 31(1898)年に『歴代御陵墓参拝道路御宮址官国幣社便覧』(奥野 1898)を出版する。本書は府県別に「陵」「墓」「宮址」「官国幣社」の所在地を一覧表にした書物である。本書の「緒言」にはどこからでもよいので、「帝国臣民」の義務として陵墓を参拝するように求めている。「便覧」という名称が示すとおり、まさにガイドブックとしての意図が感じられる。

このように奥野陣七は書物の刊行という方法によって、一般大衆向けに「皇陵巡拝」という行為を周知した人物として位置付けられる。しかしながら、その後まもなく檜原神宮との間でトラブルを引き起こしたようであり、明治 36(1903)年には奈良県知事から「畝傍檜原教会」の認可を取り消されている。このようなことを経緯として、その後、奥野が陵墓に関わることはなかったようである。

続いて取り上げる人物としては、藤澤南岳と小林利恭・利昌父子であり、彼らの活動を見ていきたい。藤澤南岳は天保 13(1842)年に讃岐国で出生し、大正 9(1920)年に逝去した人物である。父である藤澤東咳から泊園書院を継承し、その私塾において多くの門人を指導した。この泊園書院と関西大学が深い関係にあることはいうまでもないが、明治から大正期にかけての大阪を代表する知識人であった藤澤南岳もまた、一般大衆向けに「皇陵巡拝」を啓蒙した人物として特筆するべき

ものがある。

この藤澤が編輯者として、明治39(1906)年に『皇陵巡拝地図』(図1)を発行している(藤澤・小林1906)。そしてこの地図の発行者が、小林利恭である。小林利恭は「おこし」を主力商品とするお菓子商「あみだ池大黒」の第2代当主であり、当主は代々「林之助」を名乗る。そして第3代が、息子の利昌である。この父子は明治22年頃から陵墓の巡拝を始めたとあり⁽¹⁾、前章で述べたとおり陵墓の治定が完了してからまもなく、巡拝を行なっていることとなる。

藤澤と小林は、おそらく藤澤が学術的な面から地図の刊行を先導し、その資金的な援助を小林が担当したものであろう。この地図の刊行を遡る8年前には、やはり藤澤と小林によって、この『皇陵巡拝地図』の原型となる『皇陵巡拝略図』が刊行されている(藤澤・小林1898)。この『略図』は、京都・大阪・奈良・滋賀の各府県において陵墓のある箇所だけを図としたものであるが、その中には鉄道駅舎の位置も描かれていることから、まさにガイドマップとしての機能を備えている。その改訂版として刊行された『皇陵巡拝地図』は陵墓の所在する部分だけではなく、京都・大阪・奈良・滋賀の全体を1枚の地図とし、その中に陵の位置を示した図となっている。この地図こそが、昭和に至るまで歴代天皇陵の位置を示したガイドマップの基本図として利用されていく。

もちろん藤澤は、奥野の活動や出版を十分に把握しており、彼の著作に触れていたことを自ら記述している。奥野は神武天皇陵を巡拝の一番としているが、藤澤は大阪に居住したためか、堺市の履中天皇陵を巡拝順の最初に置いている。あるいは、奥野との差異を示そうとした可能性も考えられる。

以上、奥野陣七と藤澤南岳・小林父子の出版活動から、明治時代の皇陵巡拝を見てきた。この時代背景としては、明治憲法の発布、そして日清・日露戦争の勝利、さらには皇民化教育の浸透という社会背景にあって、「皇陵巡拝」という行為が一般大衆のなかに定着しつつあることがわかる。次章で詳述するように、本山彦一が「皇陵巡拝」を新聞というマスコミの力を通じて広めていく下地は、この明治期に芽生えていたことが指摘できると考える。

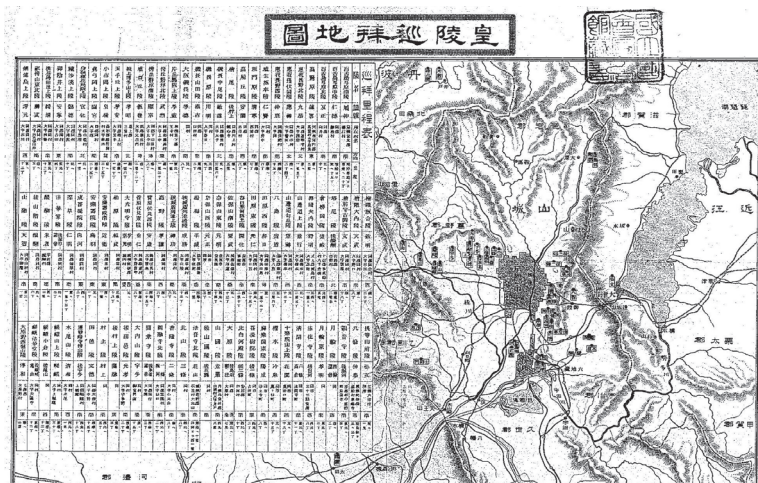


図1 『皇陵巡拝地図』部分 (国会図書館所蔵)

2. 『歴代帝陵巡拝図』の刊行と「皇陵巡拝会」の発足

本章では大正6年に本山彦一が刊行した『歴代帝陵巡拝図』の詳細と、同時期に設立された「皇陵巡拝会」の活動を見ていきたい。この活動によって、「陵墓を巡拝するということ」が国民の中に浸透していく過程を明らかにしていこう。

－ 1 『歴代帝陵巡拝図』の概要

それではまず、大正6年に本山が配付した『歴代帝陵巡拝図』を見ていきたい。大きさは縦54.2cm、横38.3cmを測る一枚刷りの地図である(写真1)。筆者の手元にあるものは12折りされており地図しかないが、本来は封筒に入れて配付された可能性もあろう。表面の上部中央に『歴代帝陵巡拝図』とあることから、これを正式名称として呼称していく。

表面の地図は、先述した『皇陵巡拝地図』と同様京都・大阪・奈良・滋賀の全体を1枚の地図とし、その中に陵の位置を示した図となっている。参拝の順序としては神武天皇陵を1番目とし、奈良県から京都府・滋賀県・大阪府の順に陵墓をめぐる行程を示す。当然距離的に近い陵をめぐるっていくことになるから、必ずしも歴代順というものではない。そして最後の陵は、堺市の履中天皇陵となっている。藤澤南岳とはまったく逆の行程となっており、むしろ奥野陣七が示した行程に近い。これまでの地図と異なる点としては、陵と陵を朱色の点線で結ぶことによって行程を見やすくし、実際に携帯して巡拝することを目的としているように思われる。地図の左上には「代新年祝詞 松蔭 本山彦一 大正六年元旦」として、約千字に及ぶ文章が掲載されている。その文章の中に、本山がこの地図を配布した意図と、皇陵巡拝への意識が読み取れるので紹介しておきたい。

「祖先崇拝の淵源は皇室にあり。国史の中心は列聖にあり。苟も歴史に基きて国民精神の振興を図らんとするには、先ず列聖山陵の御所在を知らざるべからず。独り之を知るの

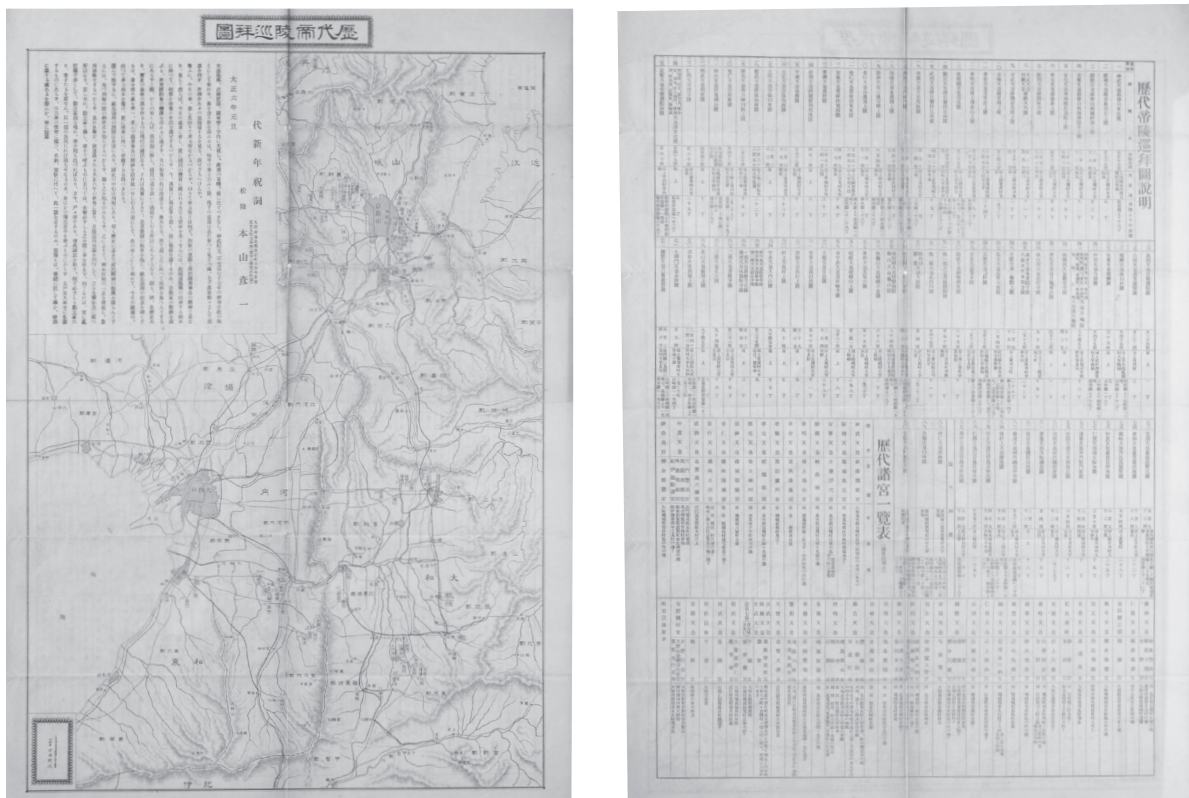


写真1 『歴代帝陵巡拝図』 表・裏

みならず、之によりて報本反始の一念を發起し、参拝崇敬せざるべからず。」(旧字体の漢字は、当用漢字に変換した。)

このように配付の理由を語るが、けして自分は勤王家でもなく孝子でもない、ただ一人の良民であって、少しでもこの地図が役立つことを願うという気持ちを記す。

裏面には「歴代帝陵図説明」と題して、参拝順に「御陵名」「周囲兆域」「所在地」「前陵との距離」を一覧表として掲載する。最後に「図外御陵」として「淳仁天皇陵」「崇徳天皇陵」「安徳天皇陵」についても、同様の項目を記している。さらに「歴代諸宮一覧表」を喜田貞吉の研究に依拠したことを記した上で、「歴代」「宮号」「所在地」を一覧表にして掲載している。この一覧表形式は、奥野陣七が作成した『便覧』を想起させる。

さてこの地図であるが、実は藤澤が小林利恭と組んで明治39(1906)年に刊行した『皇陵巡拝地図』(図1)と地図の部分はまったく同じである。すなわち、再版といってよいものである。このことは昭和期になって刊行された『皇陵巡拝案内記』にも記述されている事実である(江崎1933)。よって本山も先行する地図があることはもちろん承知して配付したであろうし、先の「祝詞」のなかに図らずも「皇陵巡拝地図を刊行して」とあるように、藤澤が出版した地図の名称をそのまま使用している部分がある。異なる点は『皇陵巡拝地図』にある「巡拝里程表」の部分が「祝詞」に置き換えられ、裏面に先述した「歴代帝陵図説明」が掲載されていることだけである。

このように本山は『歴代帝陵巡拝図』を刊行しているものの、その原本となる『皇陵巡拝地図』をそのまま利用しており、さらには奥野陣七を模倣して「宮址」の場所も併せて記載したといえよう。すなわち、明治時代の皇陵巡拝の萌芽を利用して、さらに発展させていこうという姿が読み取れる。

－2 「皇陵巡拝会」の発足と岩井武俊の活躍

この本山が『歴代帝陵巡拝図』を配付した大正6年に、「皇陵巡拝会」という団体が設立されている。続いてこの団体と本山彦一が社長を務めていた大阪毎日新聞社(大毎)の関与、さらには大毎の記者として、この会のスポークスマンのような立場となった岩井武俊の活躍を見ていきたい。

この大正6年に設立された「皇陵巡拝会」は、お菓子商「あみだ池大黒」の3代目である小林利昌を中心に設立された。この利昌は先述の通り、明治39年に藤澤南岳とともに『皇陵巡拝地図』を刊行した2代目利恭の息子である。この会の事務所は、まさに大阪市西区北堀江の利昌宅に置かれている。先に本山がこの年の正月に配付した『歴代帝陵巡拝図』が、明治39年に刊行された『皇陵巡拝地図』の再版であることを指摘したが、そうである以上、本山もこの「皇陵巡拝会」の設立には関与していたと考える方が妥当であろう。そしてこの会の活動が大毎の紙面に頻繁に掲載されていることを見ると、会の設立からその活動に当たっては、本山の手腕も大いに発揮されたと考えられる。船越論文において大毎の記事が丁寧に紹介されているが、そのなかでこの会が「紳士団の御陵巡拝」として報じられていることを紹介している(船越2001)。すなわちこの会の設立に賛同した人々は大阪財界の有力者であって、その中には大阪商業会議所の会頭を務め、さらには児島惟謙等とともに本学の創設にも関与した土居道夫も名を連ねている(土居は、この大正6年に逝去)。

この会によって企画された皇陵巡拝の様子は、大毎の記者である岩井武俊によって詳細に報じら

れた。この岩井は、明治19(1886)年に京都で生まれ、大正3(1914)年に大毎に入社している(外山1965)。入社してまもなく大正5年には、京都、奈良の陵墓を巡拝し、その状況を記事にしている。これはまさに「皇陵巡拝」のルポルターージュ記事であり、各陵墓の紹介やその歴史を説明している。このような記事が大毎に掲載されること自体、社長である本山の意図が反映していると考えられ、記事を執筆した岩井は大毎という媒体を最大限に利用して、皇陵巡拝を一般大衆に知らしめていくという大きな役割を担ったといえよう。

さて、この「皇陵巡拝会」の活動の一つに、巡拝を容易にするために各陵墓の周辺に石柱(道標)を寄進するという活動がある。この石柱は現在も関西の陵墓周辺には、「皇陵巡拝会」と刻んだものを時々見つけることができる。その数は現在知られているものだけで、70本あまりを数えることから、当初はもっと多く設置されたと考えられる。その一例として、泉涌寺境内にある石柱の写真を掲載しておく(写真2)。この石柱には昭和4年12月の建立年月日が刻まれており、次章で述べるように「皇陵巡拝会」は、大正6年に設立された後、昭和初期に至るまで、あちこちにこの石柱を建立していることが窺える。

しかしこの「石柱の建立」事業についても、実は先行して実施した団体が存在する。その会は「大阪皇陵参拝団」と称するものであり、富山辰三、後藤安吾を中心に大正2(1913)年に設立されている。この団体による活動内容の詳細は明らかではないが、現在、堺市堺東駅前に残る石柱には「大正2年3月 大阪皇陵参拝団」と刻まれた石柱が、仁徳天皇陵・履中天皇陵・反正天皇陵の方向と距離を示している(写真3)。

この大正2年という建立時期は、現在残されている同様の石柱にあって、かなり早い段階に設置されたものといってよい。現在この「大阪皇陵参拝団」によって建立された石柱がどれくらい残さ



写真2 泉涌寺境内石柱 表・裏

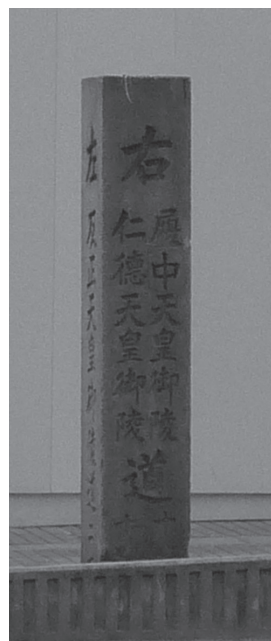


写真3 堺東駅前石柱 表・裏



れているか確認はできていないが、「皇陵巡拝会」が建立した石柱の方がはるかに数が多いことは間違いない。これはそれぞれの会の懐具合によるものであろうが、「皇陵巡拝会」が大阪の著名な財界人を多く会員に擁していた以上、各地に石柱を建立したことは当然であろう。

この石柱の建立を誰が最初に発案したか、そして誰がそれを実行したかについては、まだ多くの検証が必要である。しかし大正2年に「大阪皇陵参拝団」が建立した石柱が残されている以上、「皇陵巡拝会」が最初の発案者でないことは確かである。確実なことは「皇陵巡拝会」が潤沢な資金によって多くの石柱を建立したという事実であり、結果的に一般大衆を「皇陵巡拝」という活動に導く一つの要因となったということである。

本山は皇陵を巡拝するための地図を、明治期に刊行されていた藤澤南岳の地図によって再版し、巡拝者の利便性を図るために現地に石柱を建立することを「大阪皇陵参拝団」からアイデアを得て、各地に次々と建立していく。さらには新聞という公器を用いて、皇陵巡拝という活動を啓蒙していく。すなわちこれらの活動のトータルデザインを描いた人物が本山であり、大毎に記事を書いたのが部下の岩井であり、資金的な面からの援助を大阪財界の重鎮たちが担い、皇陵巡拝が大衆の中に広まっていき、明治期にはなかった組織的な活動へと発展していったものと考えられる。

－3 大正期における「皇陵巡拝」の背景

これまで大正6年元旦の本山彦一による『歴代帝陵巡拝図』の配付と、同年に設立された「皇陵巡拝会」の活動を見てきた。続いて本節では、改めてこのような活動が活発化していく背景を考えていきたい。

「皇陵」というものが一般の人々に大きく意識された背景として、明治45(1912)年7月30日に明治天皇が崩御し、「伏見桃山陵」が宮建されたことが大きな要因となったことは間違いない(写真4)。さらに大正3(1914)年4月11日には、明治天皇皇后昭憲皇太后が崩御し、明治天皇陵の東横に「伏見桃山東陵」が宮建される。この両陵の宮建は、ほとんどの日本人にとって、天皇の崩御に伴って宮建された「陵」という意味では初めて見るものであり、国家元首としての天皇の墓がどんなものであるか、大いに興味を引いたであろう。そしてまた、明治という国家を諸外国との戦争を経て一等国に導いた大帝としてその死を悼み、まさに追慕尊崇の場としての「陵」へ参拝するという行為につながる。

この明治天皇の崩御が大きなインパクトとなり、一般国民が「陵」へ参拝するという行為があたりまえのこととして人々の意識に植え付けられる。そこへ明治期の後半に芽生えていた「皇陵巡拝」という活動が人々に浸透していき、そこへ大毎に掲載された岩井による「皇陵巡拝」のルポルタージュが、一般大衆を実際の行動に誘引する。これらの記事に



写真4 明治天皇伏見桃山陵

触発された人々は『皇陵巡拝地図』を手手に現地へ出かけ、そこには各陵墓への方向と距離が刻まれた石柱が立っており、巡拝者の便に供したことであろう。このように明治期に芽生えた「皇陵巡拝」が本山彦一の作った仕組み、すなわち著名人によって組織された団体と皇陵巡拝会の活動、そしてそのことを報じる新聞記事、皇陵巡拝地図の配付、石柱の建立等により、皇陵巡拝が一部の人が行う行為から、一般大衆の多くが参加する動きへと発展していく。

さらにもう一つ見落とせない時代背景として、この時期に好調であった経済的な発展を背景として、人々の中に「レジャー」を楽しむという余裕が生まれてきたことがある。この点は橋爪紳也が指摘しているが、この大正期に「皇陵巡拝」が一般化していく背景に社会生活の変化があると思われる(橋爪 2015)。

以上のように、大正6年の正月に本山が配付した『歴代帝陵巡拝図』をとりあげて、この時期の皇陵巡拝を考えてきた。本山は自らが社長を務める新聞という媒体を利用し、一般大衆を「皇陵巡拝」へと導く仕組みを作り上げ、次の昭和10年代の皇陵巡拝ブームへと続く道筋を整えた人物として位置付けておきたい。

3. 『歴代帝陵巡拝図』刊行以後 昭和前半の皇陵巡拝

明治後半に芽生えた「皇陵巡拝」という行為は、大正年間に本山等を中心にして形作った仕組みによって、一般大衆の中に根付いていった。本章ではこの「皇陵巡拝」が昭和期においてどのように発展して、そして終焉を迎えるのかを見ていきたい。

ー1 全国的な皇陵巡拝ブームの到来

この時期における大きなインパクトが、大正15(1926)年12月25日に大正天皇が崩御し、多摩陵が営建されたことである(写真5)。同年10月に制定された「皇室陵墓令」によってはじめて東京都内に陵が営建されることとなり、関東の人々にとって「陵」がはじめて身近なものとなる。この多摩陵へ参拝に出かける人を輸送するために、昭和6(1931)年に京王鉄道御陵線が開通し、大勢の人を多摩陵へと誘った。東京の人々にとって、少し郊外にある多摩陵へ開通したばかりの電車を利用して参拝に行き、絵はがきなどのちょっとしたお土産を買うことは、レジャー的な要素を含む小旅行であったといえよう。

この大正天皇の崩御に伴うお代替りにあたって、本山は昭和2年11月に1枚の「皇陵巡拝地図」(縦106.6cm・横51.5cm)を配付している。この図についてはかつて紹介したことがあるが(徳田 2010)、大正6年に配付したものは大きさも異なることから新たに製版して作成した地図である。



写真5 大正天皇多摩陵

本山がこの地図を配布した意図としては、この年の3月に制定された明治節(明治天皇の誕生日である11月3日)にあわせて、明治天皇の遺徳を慕って刊行したものである。

このように大正天皇の崩御を一つの経緯として、皇陵巡拝は全国的な拡がりを見せ大きなブームとなる。このようなブームを示す資料として、筆者の手元にある昭和7(1932)年に刊行された1枚の『皇陵参拝図』を紹介しておきたい(写真6)。この図は縦54.7cm・横39.6cmを測り、余白を除く地図の版面は、先章で示した本山が配付した『歴代帝陵巡拝図』とほぼ同じ大きさである。この地図は昭和7年3月に刊行した奥書があるが、表題の横には『皇陵巡拝道の栞 藤澤南岳先生録』とあり、この地図の原図が明治39年に藤澤が小林利恭といっしょに刊行した地図を基本としていることがわかる。この地図には、かつての所有者によると思われる書き込みが認められ、実際にこの地図を手に天理市から桜井にかけての皇陵巡拝を行なった形跡が認められる。

そして大勢の人々が各陵墓の参拝に訪れることとなるに従い、接遇する側である宮内省の陵墓職員によって、「皇陵巡拝会」が建立したものと同様の石柱が建立されていることを紹介しておきたい。写真7に示したように、天理市柳本町にある石柱には「倭迹迹日百襲姫命墓・手白香皇女衾田陵」の方向と距離を示した石柱があり、昭和5(1930)年12月に建立したことが刻まれている。そして裏面には「諸陵寮山邊部職員」として、6名の氏名が記されている。この氏名を当時の宮内省職員名簿で確認したところ、確かに6名は山邊部に在籍しており、彼らが私費によってこの石柱を建立したことが窺える。このような宮内省職員が寄贈した石柱がどのくらい存在するかについては確かめていない。石柱は大正2年に「大阪皇陵参拝団」が建立したことを契機として「皇陵巡拝会」が潤沢な資金をもって各地に建立しているが、今日に残る石柱の中には宮内省職員が建立したものも含まれていることを紹

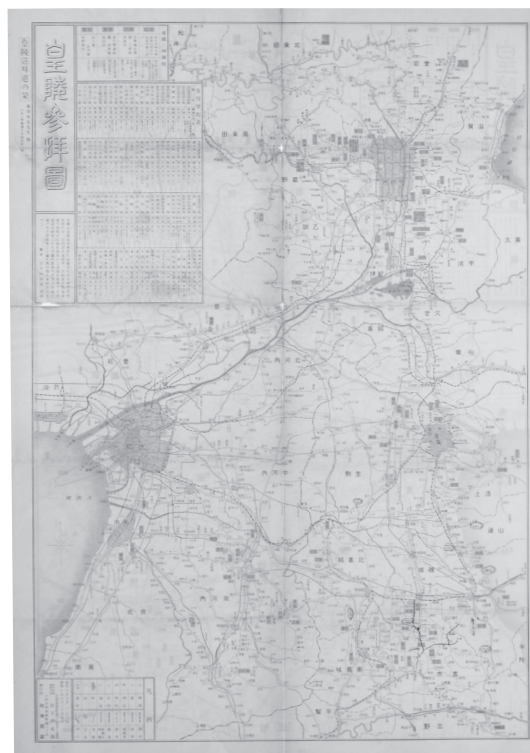


写真6 『皇陵巡拝道の栞 皇陵参拝図』



写真7 天理市柳本町石柱 表・裏

介しておく。

－2 「陵印」の設置

この宮内省職員の接遇の一つとして、昭和初期には各地の陵墓に「陵印」・「墓印」が設置されていく。この陵印が各地に設置される経緯については今ひとつ明らかではないが、現在宮内庁に残されている昭和2年に調製された『陵印墓印調書』（宮内庁書陵部識別番号40108）という公文書によると、大正13年に神武天皇陵・明治天皇陵に備えられたことを初出としている。その後、数年の間に諸陵寮が実態調査に乗り出すほど各地に備えられていったことがわかる。前稿でも述べたように昭和2年頃には「参拝記念章を朱印帳に拝領した。」との記録も残されているように、この時期に参拝者にその記念として、陵印を授与していたことがわかる。この陵印、あるいは墓印は陵墓職員の自費によって製作されたようであり、あるいは篤志家による寄贈を受けたものも含まれているようである。そのためか各印の大きさやデザインはばらばらであり、統一的な印が作られることはなかった。

この陵印を集めること、すなわち各地の寺社が御朱印を授与すると同様に、この陵印の印影を集めることを目的とし「皇陵巡拝」が一層盛んになっていく。巡拝者が細長い絹地や和紙を筒に入れて背負い、巡拝して廻る姿があちこちに出現する。すべての歴代陵をめぐる陵印を集め、その後は軸装して床の間に掛けるということを目的としたようである。現在でも、たまにこの時期に製作された掛け軸を目にすることがある。このような「陵印」を集める行為は、まさに各地の寺社を巡って「御朱印」を集めることと相通じるものがある。御朱印集めが宗教的な行為であると同時に、庶民にとっては日常を脱する小旅行の色彩があるように、皇陵巡拝は皇室への尊崇を示す行為であるとともに、人々にとってある種の楽しみでもあったと推察される。すなわち昭和一桁の段階では、人々の中にレジャー的な要素を含む「皇陵巡拝」がブームを迎え、ほぼそのピークに達していた状況が窺える。

－3 皇陵巡拝の衰退と終焉

このように多くの人々が陵印を集めて各地の陵墓を巡拝するようになった時期に、「皇陵巡拝会」の活動も引き続き活発であったようである。先に示した泉涌寺内の石柱は昭和4年に建立されており、昭和8(1933)年には『皇陵巡拝案内記』が刊行され、同会の活動がまとめられている(江崎1933)。

しかしながら昭和7年に本山が逝去し、昭和10年に小林利昌が逝去する。この時期にこれまで「皇陵巡拝」を両輪となって牽引してきた2人が、相次いで逝去する。偶然のことであろうが、このころから皇陵巡拝のブームに陰りが見えてくるように思われる。例えば先述してきた石柱についても、昭和13年に建立された現在近鉄奈良駅前建つものがほぼ最後の事例になるのではなかろうか(写真8)。もちろん各地に建立された結果、もうこれ以上は不要であるという側面も



写真8 近鉄奈良駅前石柱 表・側面

ないわけではないが、むしろ日中戦争の勃発という時代背景が大きく関わっていると考えたい。

このような時代背景の中で、レジャー的な要素も含んでいた皇陵を巡拝し、陵印を集めるという活動そのものを行なう余裕が、人々の間から失われていく。そして昭和15年の「皇紀2600年」を迎えて、最後の皇陵巡拝ブームが到来する。この時に各地の陵墓において参道の整備や陵墓地の拡張がおこなわれ、多くの人々が陵墓へ参拝する。しかしその後、欧米との大戦に突入していく中で、皇陵巡拝を実施する人々も少なくなり、社会全体が戦時色一色に染められていく。そして昭和20年8月の終戦を迎え、社会が大きく変化していく中で「皇陵巡拝」の熱気は一気に冷めていく。

このように明治期の後半に芽生えた「皇陵巡拝」は、大正期に本山等がその二葉を上手に育て上げ、一般大衆をその活動に引き込んでいく。そして大正天皇の崩御と多摩陵の營建を踏まえて、皇陵巡拝は全国的な広がりを迎え、昭和10年代までにブームのピークを迎える。その後、日中戦争から第2次世界大戦へと進んでいく中、最終的には敗戦という結果を踏まえて、明治22年にすべての歴代陵が治定された後、50年あまりの時を経て「皇陵巡拝」という行為は歴史の表舞台から消えていくことになる。

おわりに

令和元(2019)年7月、仁徳天皇陵等を構成資産とする「百舌鳥・古市古墳群」が世界文化遺産に登録された。その結果、現在仁徳天皇陵前の拝所には多くの人々が訪れている。彼らは、仁徳天皇陵に参拝のために来陵しているのであろうか。今回の世界遺産の登録にあたってユネスコに提出された推薦書を見ると、仁徳天皇の陵であるから世界遺産になったわけではないことがわかる。すなわち被葬者が誰であるかについては、今回の世界遺産登録の要件とはなっていない。世界遺産に登録された顕著で普遍的な価値についてここで詳述するつもりはないが、現在拝所を訪れている人々は、世界文化遺産としての「仁徳天皇陵古墳」を見学に来ているのであって、参拝という意識は薄いと考えるよかろう。もちろん現在も陵墓を参拝し、陵印を捺印する人々は存在する。しかしその数は、戦前に比べるべくもない人数である。

第2次世界大戦終了後に新憲法が公布され、天皇の地位は国民の「統治者」から「象徴」へと大きく変化した。このように社会状況が移り変わる中で、陵墓は皇室のご祖先のお墓であるという本義は不変であるべきだが、国民の意識の変化とともに陵墓のあるべき姿を模索していく必要があるだろう。

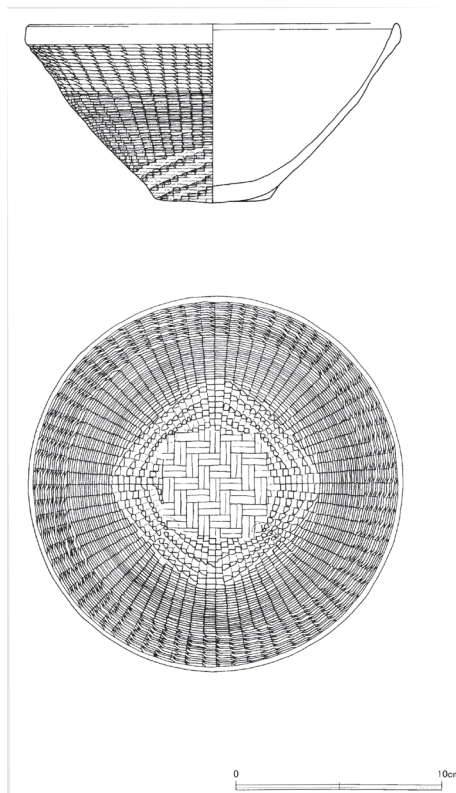
本山彦一は自らの尊皇思想を自分一人に留めず、様々な仕組みを用いて多くの国民を「皇陵巡拝」へと導いた。本山はこの事業においても、稀代のプロデュース力を発揮したといえよう。今、本山が生きていたら、現在の陵墓についてどのような仕組みを考えるのであろうか。

註

- (1) 小林利昌(3代目小林林之助)の事績については、「大阪起業家ミュージアム」のホームページに掲載されている「年表」を参照した。

参考文献

- 江崎政忠 1933 『皇陵巡拝案内記』 皇陵巡拝会 (国会図書館請求記号 569 - 431)
- 奥野陣七 1887 『皇朝歴代史』 (国会図書館請求記号特 32 - 580)
- 奥野陣七 1898 『歴代御陵墓参拝道路御宮址官国幣社便覧』 (国会図書館請求記号特 47 - 590)
- 外池 昇 2016 「神武天皇陵に憑かれた男, 奥野陣七」『検証 天皇陵』 山川出版社
- 外山軍治 1965 「本会顧問 岩井武俊氏を悼む」『史林』第 48 卷第 3 号 史学研究会
- 徳田誠志 2010 「本山彦一刊『皇陵巡拝地図』について」『阡陵』No.60 関西大学博物館
- 橋爪紳也 2015 「御所と皇陵」『大京都モダンイズム観光』 芸術新聞社
- 藤澤南岳・小林利恭 1898 『皇陵巡拝略図』 (国会図書館請求記号 839 - 199)
- 藤澤南岳・小林利恭 1906 『皇陵巡拝地図』 (国会図書館請求記号 YG35 - Z - 791)
- 舟越幹央 2001 「明治・大正期における皇陵巡拝」『大阪市立博物館 紀要』第 33 冊 大阪市立博物館



河内国府遺跡発掘笊形土器実測図（本山コレクション）